

筑波大学スポーツ医学専攻教授からJSC II日本スポーツ振興センター理事長へ転身した河野一郎氏が会長の「全給連」 II 全国学校給食会連合会は、渋谷区神南の国立代々木競技場内に事務所を構えています。より正確に述べれば、「各都道府県学校給食会及び独立行政法人日本スポーツ振興センター」を会員として組織」しているのが、昭和32年設立の全給連。

知事時代、全小中学校の給食に「地域食材の日」を導入した際の、ほろ苦い記憶が蘇りま

連載
第3回

す。長野県は農家戸数が全国最多にも拘らず、他県産のジャガイモやトマトを給食で使用しているのは何故？ 車座集会で一人の母親から質問されたのが切っ掛けでした。

全て信州産の食材で賄う日を毎月設けようよ。高齢の農業者に栽培の苦勞話を教室でして貰えるといいね。感謝を込めて低学年の児童が描いた給食の絵を防水加工して、圃場の一廓に飾るのはどう。予算査定時、教育委員会に伝える

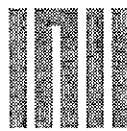
ささやかだけど、
たしかなこと。

田中康夫

You are the Hope for Tomorrow.

「国威発揚」と「商業主義」から脱する オリンピックの新たな伝説＝レジェンドを

と、豈にらんや難色を示しました。
「学校給食会の指導に基づき、年間通しての食材調達計画を策定済みです」と鮎も無く、全国で最初に30人学級を全学年で導入する方針には諸手を挙げて賛同してくれたのに……。今度は農政部に提案するや「是非やりましょう」と、二の足を踏む県教委の職員を引き連れて僅か一ヶ月で、当時120も存在した市町村全てから同意を取り付けてくれました。



「コンクリート三面張りではなく、オタマジャクシも暮らせる掘割の用水路を」と

僕が語る度に抵抗した、土地改良組合や農業協同組合とのしがらみの中に生きる彼らも、県職員である前に一人の父親として、より良い地域食材を子供達にと願ったのです。では、県教委は何故？ 校長OBらが幹部に居並ぶ学校給食会の権益を侵す無体な企てだと過剰反応されたのです。

その全給連が母体のJSCが「日本を変えたい、と思う。新しい日本をつくりたい、と思う。も

う一度、上を向いて生きる国に。」と意句を掲げるも無責任な迷走を続けた「新国立競技場」は急転直下、官邸主導で工費抑制と2020年春の完成を前提に「ゼロベース」で見直す決断が下されました。

「JSCや文科省が扱う素材ではなかった」。7月22日に日本記者クラブで、森喜朗元首相は披露しました。「JSCは文科省の下部組織。専門家も居ない。元々、学校給食とか交通安全とか。ボールスポーツ振興くじを扱うようになって、お金が入るようになった。1000億円以上売上げがある。だがスーパーゼネコンを相手に交渉するのは、文科省ではかなり無理があった」

「浩沢栄一翁らの請願で天皇崩御翌年に鎮守の杜として明治神宮が、他方で広く市民に開放される公園として神宮外苑が造営され、一帯は高さ規制15mの東京都風致地区第一号に指定されます。

が、好事魔多し。ロンドン五輪メインスタジアムより3倍も広い床面積の競技場を、敷地面積はロンドンの3分の2に過ぎぬ空間に

出現させるのが条件だった国際コングレでザハ・ハディド女史のデザインが採択されると、高さ規制75mと一気に5倍も緩和の後出しを猪瀬直樹事が決裁します。

「市民社会を経験する事なく一足飛びに近代社会に突入」し、「封建社会の武士が構成したお上に代わって官僚の支配するお上」が跳梁跋扈の日本を象徴する、と建築家・楨文彦氏が看破したのは、その直後の一昨年7月でした。

「巨大構築物は必ずしもそこに住む者、通過する者にとつて親しまれ、愛される物であるとは言えない」が故に「新国立競技場の様な巨大な施設には充分なゆとりのある敷地が与えられていない事が望ましい」。「ゆとりを建物周縁に持つ事は、様々な感情のバッファー・ゾーンの役目」で、「人間の五感と建築との関係のあり方を示す重要な指標」なのだ。として「白紙撤回」宣言後も楨氏は、「どこまで踏み込んで変更するのか。その中身が問題」と指摘しています。



屋根の有無も含め、陸上競技・球技・歌舞音曲の多目的施設に固執するの否か。維持費が嵩む無用の長物を意味する「ホワイトエレファント」に他ならぬと市民社会から批判を受けて、常設席2.5万席、仮設席5.5万席に途中で設計変更したロンドンとは対極的に、同じ8万人収容なれど常設席6.5万席、仮設席1.5万席への微調整で事足りれりと未だ巧弁するJSCの心智を踏襲するの否か。

黄昏と思われがちな超少子・超高齢社会ニッポンは、都市単位・国家単位を超えた21世紀に相応しき人間の祝祭としてのオリンピックを発信し得るだろうか。ゲンナリ感に近い国民の深層心理は、乱高下を繰り返した建設費の多寡、「ドロツと垂れた生牡蠣」を連想させる競技場の外観に留まりません。

その意味でも、と僕は繰り返して提唱しています。脱「国威発揚型」発想で競技場と開会式を分離し、二重橋前広場に立体的な棧敷を設け、会場の10万人前後に留まらず、

衛星放送やインターネットを通じて世界中の10億人に印象深き2020年の開会式を届けてこそニッポンの新たな夜明け、と昨年11月19日に日本外国特派員協会で会見した建築家・磯崎新氏の具体的提言は傾聴に値すると。

実は聖火リレーもTV中継も、更には主競技用フィールドでの開会式も、アドルフ・ヒトラーが開会宣言した1936年ベルリン・オリンピックが嚆矢。爾来、連続と続く「国威発揚」と「商業主義」の同義から脱却した、新しき伝説の開会式を、お濠と石垣、松林、江戸城の櫓を背景に全世界へ。今上天皇即位10周年の祝典行事も挙行された二重橋前広場で、国土面積の3分の2を森林が占める日本の間伐材を用いて棧敷を、宮大工を始めとする全国の匠が造営する光景も、現在進行形の新しき伝説。「ゼロベース」と粋がったものの、今度は凡庸な意匠が出現し、結局はパンドラの箱を開けただけ、と新手の失望を招かぬ為の「英断」は、果たして下されるべきありましようか。

田中康夫「ささやかだけど、たしかなこと」は毎月最終週に連載します。その週は「サンデー時評」は休載となります。